
神様のクリスマス

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のクリスマス

【Nコード】

N8957F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

クリスマスをしようというものだから、俺は仕方なく従った。

神様のクリスマス

クリスマスをしようというものだから、俺は仕方なく従った。
ハNZから各種イルミネーションやら何やらを買ってくる。

そして、彼女に渡した。

俺にクリスマスをしようとのたまった彼女は、ははんはんと頷きながら俺の手から紙袋を奪って、「エコバックくらい持てば」とかわけの解らないことを言った。

変な顔を俺がしていたのだろう、彼女は目を細めて、「エコ」と言った。

「で？」

「エコしないヤツには山ノ神の祟りが訪れるだろう」と物騒なことを言って、俺を蹴った。非情に理不尽だ。

金的にダメージ受け、蹲る俺。

彼女は鼻を鳴らしながら、うつすら雪の積もった山へ消えた。もみの木でも用意するのだろう。

俺は社務所を過ぎて、自宅へ向かった。

俺の家は神社である。そう、神社だ。

神社なのにクリスマス。

既に初詣に備えて、神楽の準備やらで忙しいのにクリスマス。あいつはアホウなんじゃないかと思う。

そりゃ、新年とクリスマスが時期的にズレていれば神社だってクリスマスやふゆの行事をするのも吝かじゃない。

俺は実家を継ぐ気なんてサラサラないが、手伝いをしなくてはいいけない。

たとえば、破魔矢づくりとか。

「おい。おいしい」

背中を叩かれた。

「なんだ。おまえ、山にいったんじゃなかったのか」

「よく考えてみるに、神木でもいい気がした」

ご神木は本殿の裏手にある。

ひっそりとした鎮守の森にあり、まさか、あれをイルミネーションでぎんぎらぎんにしてしまうのだろうか。

「そうそう。ぎんぎらぎんにするのだ。さりげない地味な神木をぎんぎらぎんにさりげなくするのだ」

「旧い歌ふるいだな……」

「私は紅白好きだからな」

「近藤真彦って紅白出たのか？」

「さあ」

「さあじゃねーよ！ 三十年近く前の歌とか、二十台の俺が知ってるわけがねえ。てめえのような、オバさ」

「うつさいなあ」というや、俺の弁慶の泣き所を蹴ってくる。おばさんだろう？ おまえ、おばさんだろう？ いや、年齢的にはおばあさんだろう？ だって、おまえ、神様だろう？ 何百年も生きているんだろう？

彼女は神様だ。

真名は誰も知らない。だから、おまえとか、おい、とか呼ばれている。主に、俺が。

宮司の親父は、単に神様とか言っているが、実に胡散臭い存在ではある。

見た目、ロリっ娘こだし。

「ところで、訊いていいか？」

「いつてみて？」

「神様なのにクリスマススするのか？」

「モチのロンだ」

「やっぱり、おまえ、センスが古い」

「ナウいではないか。実にナウい」

「ナウいとか死語」

実際問題、何百年というスパンから見れば三十年前もついこのあいだなのかもしれないが。

俺は実は知っていた。

彼女がクリスマスをしよう、などのたまった理由を。

彼女は神様だが、別に奇跡を起こせるわけもなく、単に不老不死なだけだ。

最初は俺も信じていなかった。しかし、俺が十年経って大人になってもあいかかわらずロリっ娘のまんまなので、信じざるを得なかった。

「さあ、飾りつけをするかぁー！」

俺をひっぱっていく。

クリスマスをすると言っておきながら、飾りつけの仕方もしらないようなので、殆ど俺^{ひと}独りで飾りつけを終えた。

なのに、こいつは凄く達成感のある顔をしている。

むかついたので、頬をつねった。

「いひゃい」

「働け」

「働いてるからっ！」

「働いてないだろう。願いごと叶えられない神様のくせに」

うっと彼女は言葉に詰まる。そして、哀しそうに顔を伏せた。

「だから、クリスマスをするって言ったんだから」

そうだとさ。

イブの夜。数名が神木の前に集まっていた。氏子ではない。

彼女が連れて来いといった人物を俺が連れてきた。

神木の下にはプレゼントが山積みになっていた。

一つ一つのプレゼントを彼らに渡して、ターキーを食って、楽しんだ。

存外、面白かったが、全ての費用が俺持ちなのだけが心苦しいと

いつか、やっぱり、理不尽なのだった。

参加した人々が帰った後、彼女はしみじみと言った。

「いいことしたなあ」

「気に病んでたんだろう？」

「む？」

「願いごとされても、叶えられないから」

図星をつかれ、うろたえてから、彼女は俺を見た。

「まあ、そうだよ。あの受験生」

パーティーで俺が参考書の束を渡したやつだろう。

「毎日のように合格祈願に来て、一円玉を投げるんだ」

「一円ってケチだなあ」

「何を言うかつ！」と、唐突に怒られた。「数十円で炭鉱が買えるのだぞ。どれだけ、あいつが熱心に大学合格を……」

「待て。おまえ、センスが旧いのはいいが、経済感覚が旧いのは正直どうにかしてくれ。今回のパーティー費用いくらかかったと思ってる？」

「一銭くらいか？」

「五万六千七百十一円」

俺はレシートを見せてやった。

神様はあんぐり口を開けて、俺を見ると、すぐに身をひるがえ翻し山へ消えた。

「ちよ、待て。逃げんなっ！」

名無しの神様はほとぼりが醒めるまで、山から降りてこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8957f/>

神様のクリスマス

2010年12月31日18時55分発行